

# 大念佛

No.82  
発行/融通念佛宗  
総本山 大念佛寺  
大阪市平野区平野上町1-7-26  
TEL.06-6791-0026

題字：融通念佛宗 管長 倍巖良舜

お盆は私たち日本人にとっては欠かすことの出来ない年中行事になっております。  
民族大移動といわれるように、車は道路が大渋滞。列車は超満員の中、大きな荷物や土産を持ち、子供を連れ大変な思いをしながらも故郷へと思いをせ帰省されます。懐かしい祖父母両親兄弟友人に会うため、孫の顔を見せるため、せめて一年に一度はご先祖様のお墓参りをとの気持ちで帰られます。迎える側も布団の用意、食事の準備と母親、兄嫁は盆と正月一緒に来たような大忙し、それでもまだか、まだかの気持ちで待つておられます。人と人をつなげる伝統行事であります。

お盆は正しくは盂蘭盆といい、『仏説盂蘭盆経』というお経の中に説かれている大切な仏教行事であります。  
お盆のいわれは、お釈迦様の十大弟子の一人に神通力第一といわれた目連尊者という方がおられました。神通力とはあらゆることを見通せる力で、目連尊者はある



## 盂蘭盆

融通念佛宗宗務総長 田中瑞修

日母親のことを懐かしく思い、今どうしておられるだろうと神通力を發揮して母親を探されました。あの優しく、慈愛に満ちた母親のこと、必ず極楽浄土におられるはずと天上界を探されたのですが、母親の姿を見つけないこと出来ません。次に修羅の世界、畜生の世界と探されたのですが、見当たりません。まさかの思いで恐る恐る餓鬼の世界をみてみますと、あのふくよかだった母親が見る影もなく、骨と皮とに痩せ

日母親のことを懐かしく思い、今どうしておられるだろうと神通力を發揮して母親を探されました。あの優しく、慈愛に満ちた母親のこと、必ず極楽浄土におられるはずと天上界を探されたのですが、母親の姿を見つけないこと出来ません。次に修羅の世界、畜生の世界と探されたのですが、見当たりません。まさかの思いで恐る恐る餓鬼の世界をみてみますと、あのふくよかだった母親が見る影もなく、骨と皮とに痩せ

日母親のことを懐かしく思い、今どうしておられるだろうと神通力を發揮して母親を探されました。あの優しく、慈愛に満ちた母親のこと、必ず極楽浄土におられるはずと天上界を探されたのですが、母親の姿を見つけないこと出来ません。次に修羅の世界、畜生の世界と探されたのですが、見当たりません。まさかの思いで恐る恐る餓鬼の世界をみてみますと、あのふくよかだった母親が見る影もなく、骨と皮とに痩せ

### 大念佛寺 年中行事ご案内 (八月5年末)

- ◎八月十六日(木) 午後七時 盂蘭盆・法界大施餓鬼
- ◎八月十六日(木) 午後八時 万灯会
- ◎九月九日(日) 午前六時二十分 半斎勤行
- 午前七時二十分 大和御回在御出光
- ◎九月十六日(日) 午前十一時 後小松天皇忌
- ◎十二月十七日(月) 午後一時 大和御回在御帰院
- ◎十二月三十一日(月) 午後十二時 除夜法要 (鐘撞き、ぜんざい施与)
- ◎毎月二十六日 午後一時三十分 (日曜日の場合は翌日になります) 定例布施

◆行事予定は変更する場合があります。  
★写経のご案内  
毎月二十六日、午前九時三十分より午後三時まで、白雲閣にて写経(巻千円)を行っております。  
★納骨のご案内  
本堂に於いて、午前九時三十分より午後四時まで年中無休で宗派は問わず納骨を受け付けております。尚、納骨の際は、事前にお問い合わせ下さい。

●お問い合わせ  
大念佛寺宗務所  
☎〇六―六七九一―〇〇二六

★瓦勸進のご案内  
一口二千円で本堂に於いて受け付けております。

融通念佛宗 総本山  
大念佛寺

管法主 倍巖 良舜  
宗務総長 田中 瑞修  
教学部長 濱田 全真  
庶務部長 佐々木智祥  
財務部長 篠塚 章臣

この度の大阪府北部地震並びに西日本豪雨に、被災された方々に心からお見舞い申し上げます。  
融通念佛宗 総本山 大念佛寺

# 祈りの姿

布教師会会長 沢田善秀

もう五、六年ほど前になる。京都鞍馬寺に詣でた時のこと。父娘と思しき二人が、本殿の前で心に般若心経を唱えておられた。

あまりに真剣なお姿に、私を含む他の参拝客も遠慮をして、少し離れた場所でご本尊に手を合わせ、そのまま静かに失礼をさせていただいた。

一体何を願っておられたのだろうか？

いまでも、その父娘の姿は忘れることができないでいる。

およそ神社仏閣に参拝する者は、心静かに手を合わせ祈るものである。

「祈り」とは、本来「意宣り」という言葉を当てる。

それはまさに「意（こころ）をのべる」ということであり、神仏と己が対一になって、わが心の内（願い）を述べる事である。

その時の父娘の姿には、何かしら必死な思いが感じられ、「よほどの願いなのだろう」と他人事ながらその成就を願わずにはおられなかった。

人は、弱い生き物である。おのれ一人の力ですべてを成し遂げる事など、到底できる事ではない。物理的な力のみならず、精神的にも不安定であり、何か絶対的なものに頼りかからねば、次の一歩を踏み出すことさえ躊躇してしまうこともある。

この父娘も、何がしか神仏に絶

るより他に術のない状況に置かれていたのかもしれない。

しかし、この「弱い生き物」である自分という人間を認めることのできる人は、恐らく少数であろう。

弱い自分と向き合うということは、

自分が回りから支えられているという事実を自覚していくことであり、「果たして自分はそれに見合うだけのお返しが出来ているか？」という点を反省していくことでもある。

何気なく過ごしている日々の生活の中で、「当たり前が当たり前前としてある」ということが、すでに多くの支えから成り立っている奇跡だということに早く気づいて、その一つ一つの奇跡に感謝する生活を心がけていくことが、宗教的生活の基本と言える。

祈りの姿とは、果てしない「自分の欲望」の成就を求めていく姿ではなく、自分の置かれている「恵まれた環境」に感謝をする姿なのである。

折しも平成最後の夏を迎え、仏様のみならず、めいめいのご先祖様が帰って来られるお盆がやってくる。

今の自分の恵まれた環境には、多くのご先祖様、仏様の加護があつてのものであるということに改めて自覚し、各家庭の中で、仏壇に手を合わせ祈る姿を日常のものとしていきたいものである。

祈りの姿とは、果てしない「自分の欲望」の成就を求めていく姿ではなく、自分の置かれている「恵まれた環境」に感謝をする姿なのである。

折しも平成最後の夏を迎え、仏様のみならず、めいめいのご先祖様が帰って来られるお盆がやってくる。

今の自分の恵まれた環境には、多くのご先祖様、仏様の加護があつてのものであるということに改めて自覚し、各家庭の中で、仏壇に手を合わせ祈る姿を日常のものとしていきたいものである。

祈りの姿とは、果てしない「自分の欲望」の成就を求めていく姿ではなく、自分の置かれている「恵まれた環境」に感謝をする姿なのである。

折しも平成最後の夏を迎え、仏様のみならず、めいめいのご先祖様が帰って来られるお盆がやってくる。

# 音羽山観音寺を訪ねて

おとわさん



後藤密榮 住職

奈良県桜井市にある音羽山観音寺はNHKの「やまと尼寺 精進日記」として放映されている話題の寺院です。

参道の入口に駐車場があり、そこから自分の足でお寺まで登ります。急な坂道が続き、約三十分で観音寺本堂にたどり着きます。

現在は融通念佛宗総本山大念佛法の末寺ですが、創建は奈良時代。その頃山中は観音霊場として賑わい、

多くの壮大な堂宇が軒を連ね、音羽百坊と呼ばれていました。『多武峰（とうのみね）略記』には天平勝寶元年（七四九）心融法師の創建とあり、別の記録には京都清水寺の開祖延鎮僧都が建立したと

もありません。貞観十八年（八六七）「音羽流れ」という豪雨による山津波で堂宇がごとごとく崩壊し、この観音寺だけが残り残りました。

御本尊は七尺二寸（約二・二メートル）の千手千眼十一面観音菩薩で、古来より眼病平癒の霊験が知られており、遠方からも数多く参拝されます。

ご住職の後藤密榮さん、副住職の佐々木慈瞳さん、そしてお手伝

い「まつちゃん」の三人がこのお寺を切盛りし生活されています。

密榮さんが観音寺に入られたのは、密榮さんのお知り合いに生まれつき目の不自由な方がお

られて、その方と数人で月一回お参りするようになったことがきっかけです。もともと高野山で修行されていた密榮さんでしたが、自然に囲まれて多くが自給自足のなか、信者さんや里の人達と助け合いながら心を開いて交流できる山寺の生活は何にも代えがたいものがありました。そして、私の居るべきところはここしかないと思われたのです。それが観音様のお導きだったのかも知れません。

副住職の慈瞳さんも同じような気持ちで得度され、密榮さんにひかれて弟子になられました。また、慈瞳さんは臨床心理士の資格を取得し、病院で終末期の患者さんの緩和ケアや学校での児童生徒のカウンセリングもされています。

信者さんや地域の人の信仰心も篤く、お米や野菜を届けて下さったり、率先して参道のセメント舗装や草刈りをして下さいます。

観音寺の三人の温かい人柄によ



千手千眼十一面観音菩薩

することもありますが、観音様を通してほのぼのとした人と人との結びつきがこのお寺にはあります。それがまた人を呼び寄せます。都会では失われつつある縁というものが、ここにはしっかりと根付いています。壮大な寺院ではありませんが、大きな力を感じました。そして、山の幸、里の恵みを材料に、一品ずつまごころ込めて手作りした精進料理は有名です。

千六三三・〇〇三三  
奈良県桜井市南音羽八三三  
電話 〇七四四・四六・〇九四四  
NHK Eテレ  
「やまと尼寺 精進日記」  
最終週の日曜 午後六時  
（再放送 水曜 午後〇時二五分  
と土曜 午前五時三〇分）

編集委員  
文 橋本悦雄  
聞き手 瀧野宗規

右 佐々木慈瞳 副住職

右 佐々木慈瞳 副住職

右 佐々木慈瞳 副住職

右 佐々木慈瞳 副住職

右 佐々木慈瞳 副住職

右 佐々木慈瞳 副住職

右 佐々木慈瞳 副住職

右 佐々木慈瞳 副住職

# 在家伝法について(五)

融通念佛宗 勸学林 学長 吉村 暲 英

## 第三、焼香式

戒香定香解脱香 光明雲台遍法界  
供養十方無量仏 見聞普薫證寂滅

戒香と定香と解脱香は 光明雲台、法界に遍き

十方の無量仏を供養してまつり  
見聞普く薫じて寂滅を證せん

ここでは勤行（おつとめ）の最初に称える御文すなわち香偈の御文を伝授されるのです。

焼香とは、香を焼き薫じること  
をいいます。その方法に線香を用いる場合と、抹香を用いる場合とがあります。線香は香の原料となる白檀、沈香、丁香、安息香などを、松やにや糊で粘り上げて細い棒状にしたもので、一般に最も多く用いられています。抹香は様々な香の原料を粉末状にしたものです。これを火種にくすべて、儀式や法要等で参拝者が指につまんで献香します。

香偈の意味は甚だ難解ですが、第一句目は仏前に香を焼くことによつて、仏法の徳が顕れ、五分法身といつて、私たちに本来的に備わっている仏性（仏心）が開けて、この身このままで仏さまの境界に入ることができるかと教えているのです。

まず、戒、定、解脱という悟り



に至るための最も大切な徳目を掲げてみます。戒とは、悪を止め、善を修することを説いた仏さまのいましめのこと。定とは、禅定のこと。解脱とは、煩惱から解放されて自由な心境になることです。

この三徳に慧（智慧）と解脱知見（さとりに至るための清い眼）を加えて五分法身といふ解脱の中に集約されています。

香偈に限らず、経文を口にすることができるとは、並々ならぬ縁のしからしむるところであつて、尊くもあらがたいことでもあります。考えてみれば、私たちは朝おきてから夜寝るまでいろんなことを喋つています。その中にはとりとめ

ない話も多いものです。そののみかこの口は不平不満の言葉、人を罵る言葉、人の悪口や噂話などを好むと見えます。口は禍の元とはよくいったものです。その同じ口に、仏さまの御文を称えさせていただくこともできるのです。

口に経文を称えたら手は自ずと合掌の姿になります。そして心が安まります。これで身口意が期せずして清らかになっていくのです。手を合わせ、口にお念仏なり経文を誦しながら決して争いは出来ません。人を罵ることもできません。不平不満もいけません。これがまづ法文の功德というものでありましよう。

その上、仏前に香を焼いたならば、その芳香がいつそう私たちの身も心も清らかにしてくれます。清らかな心に悪は止み、善根の芽生えが必ず生じるものであります。これを戒香と名づけるのです。そしてまた、あれも欲しい、これも欲しい

いという欲心や、憎い、惜しいなどの心の波風をもきつと鎮めてくれるでしょう。これを定香というのであります。そこに自ずと私たちを縛っている執着の縄から解き放たれ、喜びと感謝の気持ち湧き、今まで気づかなかつた些細なことにも喜びが生まれ有難さが感じられるのであり、これが解脱香であります。

この見解はいづれも法の功德を香になぞらえたものであります。

第二句は、香の功德が光明となつて紫雲のように自由自在に法界（現実世界）にゆきわたるということです。

第三句は、香供養のことが説かれていきます。

香は燈明、花とともに仏供養の代表的なもので、十方の無量仏を供養すると説いています。

十方とは、東西南北とその四隅、さらに上下を加えたすべての方向のことです。すなわち香はあらゆる世界におられる数多の仏さまに供養がゆきわたるといふことです。

因みに供養とは限りない敬いと感謝の気持ち捧げ尽くすことです。

第四句は、香を供養する人が受けるご利益と功德について述べたものです。見聞とは見仏聞法のこと、香を供養する人は心の眼が開けて、仏さまの相好（おすがた）をはつきり見たてまつることができるといふこととあります。さらには包まれるということとあります。さらには開法の功德といつて、仏さまの説法が、心に沁みて法悦に満たされるのです。



「寂滅を證せん」とはさとりの境地を体得するであらうという意味です。さとりとは迷いの世界から目覚めることであり、正しい道を踏み外さない生き方をするをいいます。

以上、香偈の文を四句に分けて簡単な説明を試みたのですが、全体を要約すれば、「香を焼くことによつて、かぐわしい香りが十方の世界に薫じるように、法の功德がごとごとく成就し、自身もまたさとりの境地に引き入れられるであろう」という意味になります。

香偈を理論の上から説くと（理相）、概ね以上のようにありますが、これに対して香を焼くという実践の方面（事相）から説くと、次の三意になります。これは香のはたらきともいふべきものであります。それは、

### 一、清浄のために

### 二、飲食のために

### 三、仏使のために

清浄のためには、香は不浄を

消し去り、芳香を漂わせ、今いる場所（道場）を清らかにするとともに、私たちの心をも洗い清めてくれるはたらきを有するためであります。これを清浄香といひます。

飲食のためには、香の薫りは仏、菩薩、ご先祖さまの食物、飲み物であるということです。特に人が死んで四十九日間の中有（中陰）では、食香といつて亡き人は専ら香を食するので香を絶やさないといいます。

仏使のためには、仏使とは仏の使者のことで、香は私たち凡夫と仏の世界の仲立ちとしての役割を担っているからです。香煙が立ち上る様子は、私たちの切なる願いが仏さまご先祖さまのみもとに届く確かな手応えと感ずることができるといふこととあります。

焼香の際には、この三つの香のはたらきになぞらえて線香なら三本、抹香を拵（か）じる場合なら三遍を基本とするのです。もつともこの三つのはたらきを一つに込めて、線香なら一本、抹香なら一遍でもよいのです。焼香について特に心がけていただきたいことは、香爐には清らかな灰を使用すること。灰の代用に砂を用いることは禁物。また、灰の中に消したマッチ棒をさしこむことも禁物です。さらに香はできるだけよい薫りのものを使用することも大切なことです。

# 納骨のご案内

仏教では亡き人の遺骨を崇め祀る習慣が古くからありました。紀元前五世紀ごろ、お釈迦さまが八十歳で亡くなられると、多くの弟子たちは悲嘆の中にも、偉大なる師に対する恋慕の情たちがたく、その遺骨を各地に配分し、丁寧に祀りし、供養を捧げました。そして遺骨を祀ったところに塔を建て、遠くからでも拝めるようにしました。

だきましたご家族一軒ずつ、本堂内陣（普段はお上がりいただけない一段上の所）のご本尊の御前に設けられました納骨祭壇にご霊骨を安置し、一霊ずつ懇ろに納骨供養のおつとめをいたしております。

日本では古くから土葬が主流でしたが、それでも遺髪や装身具等を山岳霊場に納める風習があり、火葬が行われるようになると、遺骨の一部（喉仏など）をお寺に納め、ご本尊のお膝もとで永遠に安らぎを得て頂きたいとの切なる思いが納骨供養となって定着しました。こうしたことからお寺に納骨するという風習は特に関西方面では今なお続けられています。

胎内仏納骨とはご霊骨をまず小仏の体内に納め、後日胎内仏納骨法要（十一月三日）に於いてこの小仏を菩薩像（胎内仏）の胎内にお納めする納骨です。楽邦殿（納骨堂）にこの菩薩像を安置し永代お祀りいたします。

一般納骨とはご霊骨を合祀して楽邦殿に永代お祀りする納骨方法です。

大念佛寺では納骨にお越しいた

大念佛寺では、ご本尊十一尊天得阿弥陀如来の広大無辺のご加護のもと、日々經典読誦の功德と供養によって、納骨の各霊が清らかなお浄土に安らいでいただけることと存じます。

## 小仏



詳しくは、  
大念佛寺ホームページ  
<http://www.dainenbutsuji.com/>  
本山納骨係  
電話〇六六七九一〇〇二六



楽邦殿の菩薩像（胎内仏）

## 鐘楼堂の改修進む

大念佛寺本堂の北にある鐘楼堂は法明上人が創建。寛永年中（一六二四〜一六四四）第三十八世法覚上人再鑄、文化三年（一八〇六）第五十四世洞海権僧正改鑄再建になるもので、従一位右大臣藤原家孝撰並書がある。

損が著しく、緊急の修復が必要でありました。今年の万部おねり後に工事に着手。今年中に工事が完了する予定です。除夜法要には新鐘楼堂から妙なる音色が東西南北に響き渡ることでしよう。尚、今回の工事中に発見された棟札には次のように記されている。

猿田彦大神

天下泰平

寛政十二年庚申八月二十九日

棟梁匠 水本左之助

天照皇太神宮 奉納融通総本山撞鐘堂棟札 定賢

八百万神

国家安全

権僧正洞海敬白

添棟梁 水坂主司之助

## 青年会だより

融通念佛宗青年会会長 辻 良和



今年も万部法要期間中、壁一面に「ぼさつさま」が並びました。連日、ぬりえをしてくれる子どもたち、展示されたぬりえを携帯カメラで撮影される親御さんなど、多くの方々でにぎわいました。後日、青年会僧侶でぬりえに書かれたたくさん「ねがいごと」の成就と共に、ぬりえをして頂いた皆様の身体堅固を願って法要を執り行いました。来年も多数の御参加をお待ちしております。

今後も青年会では、我々僧侶にこれらの時代に求められるもの、また青年僧の若い力であるからこそ出来ることを模索し、さらにはそれを実践に変え、進んでいきたいと思えます。どうぞご支援、ご協力の程よろしくお願い致します。

## 小径

鈴木秀子さんは聖心会のシスターで、長年ホスピスで死を間近にした患者さんに付き添われてきました。その体験をもとに、死や生き方について多くの本を書かれています。その中に「仲良し時間」と名付けられた時間があります。死を目前にして患者さんの多くは「家族の大切さがわかった」「仲違いしていた人と心を通じ合いたい」「許し合い、仲直りしたい」「さりげなく触れあっていたい」等々と強く思われているそうです。そういう心の状態になる時を「仲良し時間」と呼んでいます。

お嫁さんは毎日ずっと看病なさったそうです。最後の数日おばあさんは病気の食事はおろか、息子達が持ってきた好きな果物も一切口にしませんでした。そこでお嫁さんは手製のスープをこしらえ、それをスプーンでおばあさんの口元に運びました。おいしそうに召し上がったそうです。そのあとしばらくして、おばあさんは安心したかのように、みんなの手を握りながら静かに息を引き取られました。

ある檀家さんで、お参りすればいつもお嫁さんの不眠を話されるおばあさんがいらっしやいました。そのおばあさんが病気で亡くなられました。

「仏」を「ほとけ」と読むのは、一説に「ほどける」に由来するところから聞いたことがあります。心身の痛み、苦しみ、わだかまりから解放されることでしょうか。「成仏」は「ほとけに成る」というのはこう言うことなのかも知れません。

喜法